

安息式射法雑考

相馬隆

【要約】東亜の諸地域に痕跡をとどめる所謂「安息式射法」と云われるうしろを顧みて騎射する方法は、バルティアの創始ではない。本論考に於ては、この射法がスキタイを初めとする騎馬民族の開發にあり、安息騎兵とその戦法を考察することによって、この安息式射法といわれるものが騎兵戦における重要な戦略であった点を文献的に論証した。 史林 五三巻四号 一九七〇年七月

はじめに

馬上より背後を顧みて騎射する姿態を古代ローマ人は多くの戦闘を通じ、バルティア人騎兵に極めて特徴的な射法と考えたため、爾來、この種の射法は地域、時代を問わず所謂「安息式射法」の名を冠せられるにいたったことは周知の事実と思われる。

またこの種の図文は狩獵図の一典型として東亜の諸地域における墳墓、器物等に残存し、西欧に於てはラウファー教授、ロストフツェフ教授、我邦に於ては広義の狩獵を含め原田淑人博士、駒井和愛博士、江上波夫教授、林良一助教授のそれぞれ言及されておられるところである。

私は本論考に於て、この安息式射法というものがひとり安息に

おける創始ではなく、スキタイ、キンメリア人など騎馬民の間で早くから開發され、オリエント方面に於ては、アッシリア後期文化、アカエメネス王朝文化、バルティア王朝文化、ササン王朝文化において主として戦闘時にことに輕裝備の騎兵の間に於て行なわれた伝統的射法の一つである点を指摘し、あわせて安息軍騎兵の軍裝備の一端および戦略という観点から、この種射法の騎兵戦および狩獵における本来の意義に就いて文献的に考察を加えてみようと思ふものである。

以下、所謂安息式射法といわれるものの時代、地域的ひろがり、文化圏について遺物を掲げ略述し、後節の文献資料と比較対照し



図 1. 灰陶狩獵文壺と「安息式射法」の騎馬人物，漢時代

中国に於ける所謂安息式射法と思われる騎射の形態は既にラウファー、ロストフツェフ両教授の指摘ある如く、漢代の狩獵図に窺うことができる。すなわち、東京国立博物館学芸部東洋課保管の灰陶狩獵文壺（旧横河コレクション）の肩部における画文帯の騎馬人物はまさしく身体を左によじり、後方を顧みて後続の獣を射ている形状につくられる（図1）。馬は云うまでもなく飛走の形で、疾駆する姿態を呈示し、後方の虎か何かと思われる獣は戦国時代以降の図文に伝統的な所謂北方的図文の典型——、後方をふりか

たいと考える。



図 2. 褐釉鼎蓋と安息式射法の騎馬人物 漢時代

える姿態をとる。さらに東京、個人蔵にかかる褐釉鼎における蓋上の狩獵图中に明らかに後方をふりかえって騎射する武人が描出されている（図2、3）。後続の獣として龍、グリニフオンの怪獣が見え、鏢の四周をめぐる。ここでもまた騎馬人物は明らかに左後方に身をよじって弓を引きしぼっている。

さらに漢代の例として東京芸術大学所蔵の所謂金錯山雲鳥獸文



図3. 褐 釉 鼎

筒形銅器をあげることができるが、その二段目に於ける虎の狩獵図の中には、同じく安息式射法の騎馬人物が見える(図4)。以上漢代に於ける諸例に於て最も注目すべき点は騎射の武人はいずれも西方の広義のスキタイ式あるいはキニービド式と称する彎弓を用いているという点である。このことは、輝県固圉村趙固第一号墓出土銅鑑戰士図などにも明らかに看取される点から、後述の如くこの種の短弓は戦国末から漢にかけてに行なわれていたと見て大過ないのではないかと思われる(図5A、5B)。

また長沙発掘戦国墓葬(四〇六号墓)出土の弓、弦、弭、さらに平壤市郊外楽浪石巖里二二二号墓出土の弓はそれぞれ彎弓で、広義のスキタイ式弓であろう点が、この間の証左となるものと思われる。

唐代になるとこの種の安息式射法の図文はいわゆるササン式弓と共にひろく行なわれた。東京大学文学部考古学研究室所蔵の三彩陶、



図4. 金錯山雲鳥獸文筒形銅器に見られる安息式射法

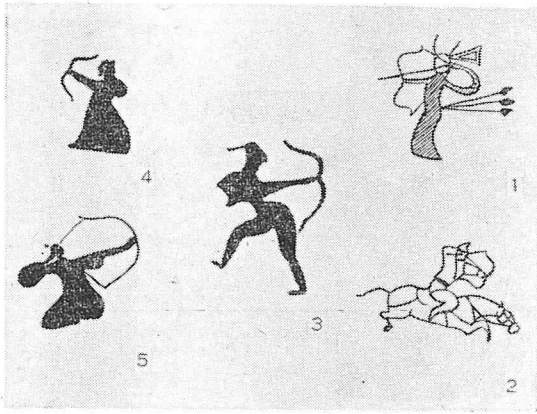


図 5A. 戦国・漢代に於ける彎弓
 1. 輝県固田村趙固第一号魏墓出土銅鏝戰士圖
 2. 河南省洛陽金村附近出土画像磚
 3. 4. 山東省嘉祥縣武梁祠出土画像石
 5. 四川省成都画像磚

狩獵文鳳首壺（唐中期）の胴部にも明らかに後方をふりかえって射つ騎馬人物が見える（図6）。東京国立博物館所蔵の法隆寺獻納宝物、狩獵文褥（絹、麻、藁製）における騎馬人物は円珠文の中に鹿文と共に果樹を中心に左右対象に配され、云うまでもなくササン風な構成の図柄となっている。騎馬人物は明らかに胡服、その使用する短弓も後述の如くまさしくササン式あわせ弓の系統である。同じく、東京、文化女子大学所蔵の碧地狩獵文錦も現在は円珠文

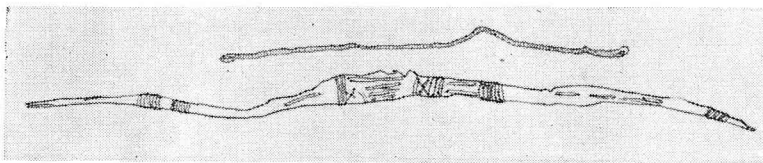


図 5B. 長沙戦国墓（406号墓）出土弓
 （拵の部分は4層の竹片よりなり、膠、漆をもって固め絲を繞らす、総じて周孔考工記の弓制に同じ）

の左断片を残すのみであるが、恐らく安息式射法の四騎を表出したものであろう。軽装の騎馬人物はうしろをふりかえって獅子を

射獵する図である（図7）。

このことは正倉院の同じく碧地狩獵文錦の胡騎も明らかに安息式射法を行なっている点から、明白であろうと思われる。

また有名な法隆寺の狩獵文錦における同じく円珠の図文の中にはいわゆる安息式射法の四騎が見える（図6）。宝冠（日月冠）、武具、馬具共にササンの銀器および磨崖浮彫を比較する時、ササンの特徴を多く具備する点は多くの先学の指摘したところである。四騎の使用する弓は典型的ササンの弓と認めることができる（図6）。

東京国立博物館保管の正倉院御物、天平神護三年（七六七）銘の銀壺上段における鹿狩りの騎馬人物も、後方

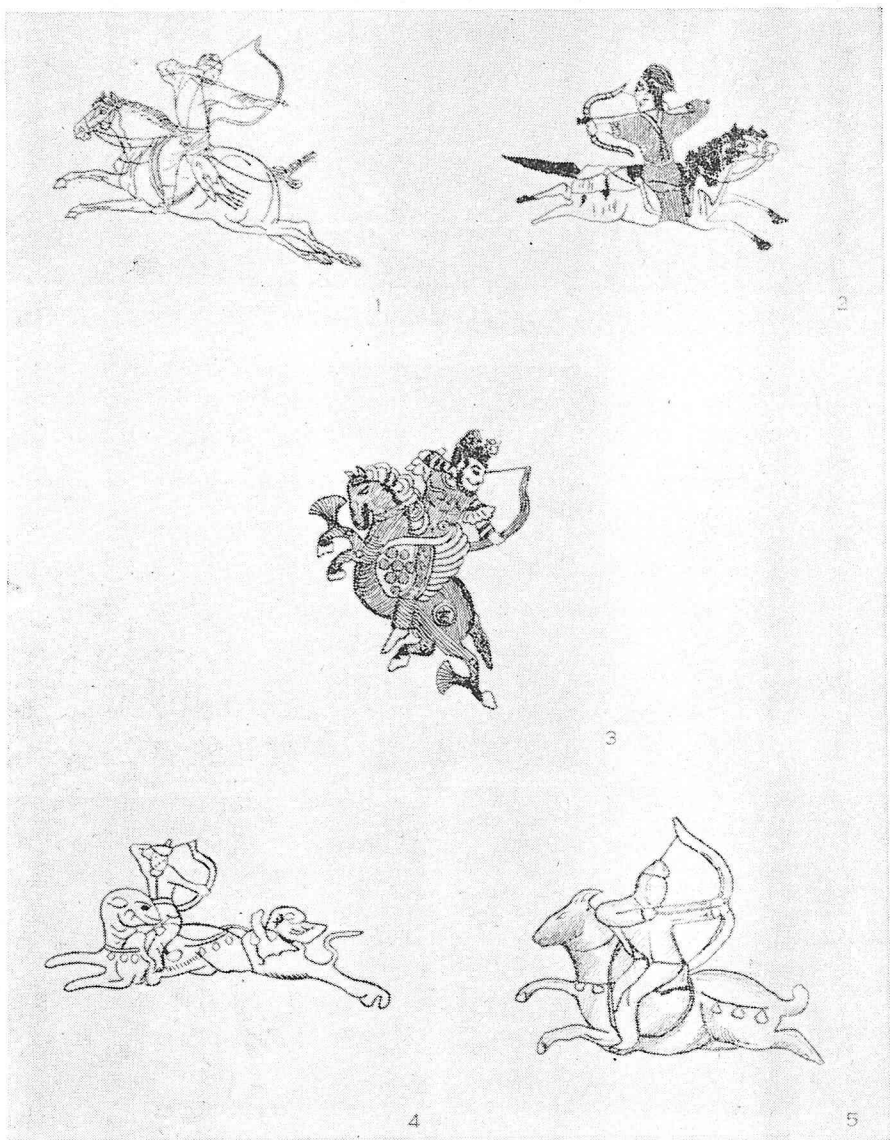


图 6. 『安息式射法』

1. 狩獵圖 銀壺 正倉院
2. 狩獵圖 舞踊塚 高句麗
3. 獅子狩紋錦部分 唐, 法隆寺
4. 木画紫壇碁局 正倉院
5. 狩獵文鳳首壺 三彩陶, 東京大学文学部考古学研究室藏

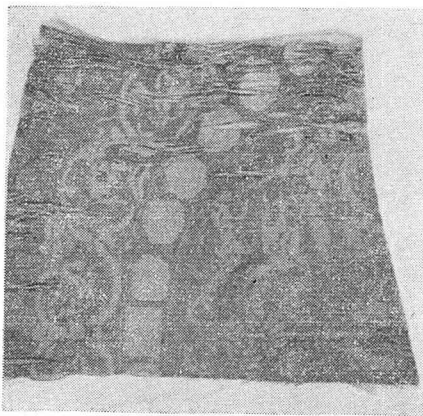


図7. 碧地狩獵文錦 文化女子大学蔵

をふりかえって騎射しており（図6）、図文の極めて自然主義的描写は、前述の東京大学文学部蔵の三彩陶に似通うものである。さらにブランドーシ・コレクシオン中の銀鏡（唐中期）の中にも、安息式射法の騎馬人物を認めることができる。

すでに典型的ササン風騎射図とは技法上可成異なるものであるが、正倉院御物における木画紫檀素局側面には、胡服、胡帽、ササン式弓の象に似た馬に乗る騎馬人物が見え、獅子を狩る。象牙象嵌によるこの騎射の図、まさしく安息式射法である（図6）。

六朝時代に於てもなお安息式射法が行なわれたであろう点は北方騎馬民族の高句麗古墳の壁画、すなわち通溝附近の舞踊塚における狩獵図によっても推察できるであろう（図6）。騎馬人物は右向き、左手でいわゆる鳴鏑と思われるものを以て鹿を狩っているのである。漢書音義に鏑前

といわれたいわゆる鳴箭は矢鏑が飛んで鳴るものであるが、史記、匈奴列伝第五十によれば

冒頓乃作為鳴鏑

と見え、匈奴の单于、冒頓が鳴鏑を作ったことが記されてある。さらにこの鳴鏑といわれるものが実用にしかかも人物の殺害にも使用された点は同じく同書の伝えるところである。とすればこの鳴鏑といわれるものもやはり実用の攻撃具の一種であり、その音を以てのみ獸類を驚かし、また戦闘の開始を告げる目的の為にのみ、開発されたとはにわかに断定できないところがある。

あるいは鳴鏑は狩獵にあっては獲物となる獸類をその棲息するところよりひき出すと共に、その位置を知らせるといふ射獵時の一具であり、同時にその音を以て敵陣の攪乱をも意味したものはあるまいか。

射手の用いる弓に注目されたい。明らかに五つの部分よりなる木、竹、骨等のあわせ弓で、前述の如く戦国より漢に行なわれた広義のスキタイ式短弓の形式と考えることができる。この点を考慮に入れる時、我国、古墳時代の文物の中にあつてこの種の彎弓の存在の可能性も充分あるのではないかと疑わしめる。

今のところ匈奴に於ける安息式射法を裏づける文献資料および考古遺物の例を遺憾ながら発見できずにいるが、後述の如く北方

胡族に於ける諸戦法より推察するに、この種の射法を用いたであろう点は容易に察せられるところである。

後六一七世紀、北コーカサスより中国国境におよぶ地域のいわゆる Saldantrasse を掌握していたソグド人は主都市、サマルカンドの他に数十におよぶ都市国家を建設していた。A・Y・ヤクボフスキー、A・M・ベレニツキー、V・A・シシュキン教授は一九四六年、有名なピャンジケントの都城址の発掘を行なったが、その中に建築装飾の部分と思われる火災によって炭化した木彫があった。小花文を浮彫した同心円の中には飛走の形の馬にのる騎馬人物が右をむき、左手に矢をつがえ、安息式射法を行なっている。下方、右側面に獅子の見える点からやはり典型的狩獵図と見てよいと考えられる(図8)。文化面に於ても、イラン語系種族が主導権を掌握していた点、またサマルカンド南方、一二kmのカフイル・カラ遺跡からもササン朝ベルシヤの彫金細工を模したものの発見もある点から、この種の安息式射法の図が、イラン方面の銀器などの図文と密接な連関関係にある点はいうまでもないであろう。またこの地はバクトリアの一属領であったカスピ海の東南、パルティアの故地、ヒルカニア地方と隣接している点、さらにそれ以前同地はアカエネス王朝期の影響を受けている点などから、

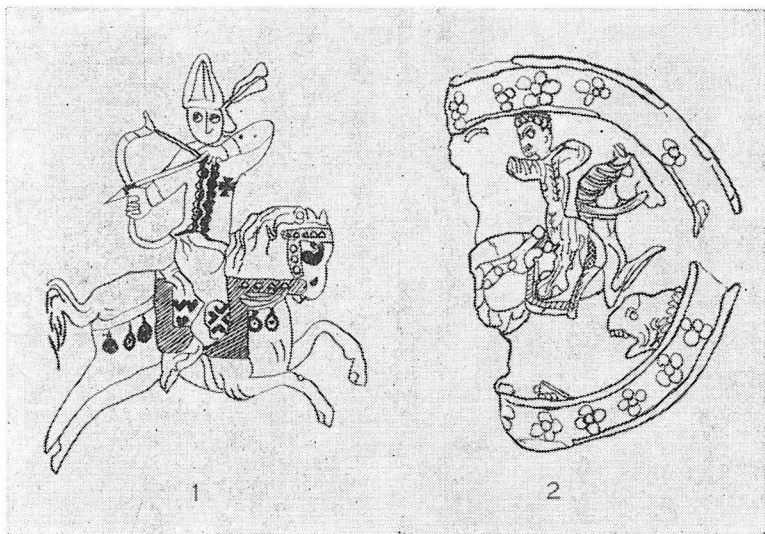


図8. ソグド人およびビザンチン時代騎兵における安息式射法
 (1. 狩獵文錦. 聖アムプロジオ教会堂 2. 狩獵図浮彫断片. ピャンジケント, 7~8世紀)

あるいはこの地方における安息式射法ははるかに早い時期に行なわれていたのではないかと疑わしめる。

オリエント方面に於けるこの種の安息式射法は意外に早い。すなわちレイヤード氏は、アッシリア後期、ニムロドにおける初期彫刻にアッシリアの冠帽とは異なる恐らくフェルト製と思われる円錐形の帽子をつけた騎馬人物が、戦車に乗って追撃するアッシリア人戦士に対し、ふりかえりざま矢を放っており、これがバルテニア人戦士に於ける風習と酷似する点を指摘している。脚の半分以上を覆う靴およびそのつまさきのそりかえった形、さらにテュニカと思われる身軽な服装および武器は騎馬民族、しかも後述の如く軽装備の騎射を主とする騎兵に特徴的要素の一つであろうと思われる。

アッシリア後期併行期、騎馬民族の間に既にこの種の射法が開発されていた点は重要なことと思われる。後述の如く、パルティア式射法といわれる射法は、本来都城の防禦、攻略を事とする定着農耕民とは戦法を異にする騎馬民の開発したものと思われ、パルティアの創始ではない。古来、騎馬民の間に伝統的に行なわれた射法の一つであったと思われるのである。



図 9. キンメリア人における安息式射法 ポンティック、ヴェイス

現今のクリミア地方の語源でもあり、トラキア人であるキンメリア人はドニエプル河の両側に住み、都邑キンメリウムを建設したが、彼等の間にもこの種の射法が行なわれていたらしい。すなわち、F・デムラー (F. Dümmler) が刊行したいわゆる「黒海の壺」 Pontic Vase の中にキンメリア人と思われる騎馬人物がふりかえりながら騎射している図が描出されている (図9)。これらの壺はイタリアで発見されていることから、その製作地の

問題はにわかに決定し難い。

フルトヴェングラー教授はこれをもってイタリアで作られたものとしたが、H・Bウォルターズ氏はキヌメとイタリアの間においている。プリニウスによれば (Historia Naturalis 三、五、九、たしかに彼等の古代に於ける故地はバイアエ Barae とクマエ Kumae の間で、その住家は主として洞穴であったという。ヘロドトスによれば、スキタイによ

つて故地を奪われたというキンメリア人はアッシリア後期併行期頃、すでにこの種の射法に習熟していた可能性がある。

スキタイは後述の如く、プルータルコスのアラキストス伝に「パルティア人はこの射法に関する限りスキタイに次ぐ」という一文もあることから、キンメリア人から受け継いだかどうかは別として、この所謂安息式射法がスキタイの間で行なわれた点は明らかである。遺憾ながらスキタイの習俗にくわしいヘロドトスの記載の中にもこの点についての言及はないようである。この点、ウラルトウ、カルミル・ブルールにおけるスキタイとの戦闘にも直接的証拠はないが、前述のニムロド出土浮彫、キンメリア人の習俗に徴し、アッシリア後期併行期頃この種の射法がスキタイの間に既に行なわれていたのではないかと考えしめる。

さてアッシリア後期に引き続きアカエメネス王朝期になると、文献的には後章で述べるようにクセノフォンのアナバシスに明らかに見え(巻三、三章、八一―一節)^⑩、ギリシヤ人傭兵の耳目を聳動するものであった。騎馬民族に行なわれた安息式射法がアカエメネス王朝期にも見られるということは遊牧騎馬民族社会と定着農耕社会との接触という観点から、また両者の戦闘方法という見地からも、極めて重要なことと思われる。

パルティア時代はこの射法がいうまでもなく最も著名となった

時期で、今日「安息式射法」という名称が知られるのはユスティヌスを始め多くのローマ時代の歴史家によって、ローマと安息との戦闘についての記述が伝世されたものに他ならない。

ササン朝時代における安息式射法の例は、帝王狩獵図を表現した多くの銀器、およびササン風染織品に数多く見られ、周知の事実と思われるので本論考に於ては各個別にわたる考察は省略しようと思う。

今一つ、つけ加えておこうと思うのは伝説上の民族、アマゾンの中にもこの安息式射法が行なわれたという点である。すなわち、ディオドルス・シクルスによれば、リビアのアマゾン兵は追手に対してうしろむきに、しかも巧みに射撃したという。^⑪

他にいわゆるササン併行期のコプト後期の織物およびビザンチンの染織の中に(図8)、この安息式射法の姿態をとるものがあるのも注意すべきである。すなわち、エジプト出土、五一―六世紀、リヨン織物博物館所蔵の「弓を引く二人の騎士」の図、同じくエジプト、アンティノエ出土、六一―七世紀、同じく同博物館所蔵の「戦いに臨むホスロウ一世」がそれである。

ササンおよび唐代の織物に於ける図文の共通性は云うまでもない。

さらにキルギス方面の青銅製品における彫刻小板と馬具の部分（七—八世紀）^⑧の中に、またブダペスト博物館所蔵の原ブルガル人芸術の「水瓶」（九世紀）の中にも同じような安息式射法を見うける。

以上、東アジアに於ける諸例に就いて略述して来たのであるが、その大きな特色は、オリエント方面の例に比し、主として「射狐」を表現したものが多くと云う点である。このことはオリエント方面に伝統的な帝王狩狐等の図文の東漸とも密接なかわりがあることと思われる。

最も注目すべき点は、狙うものが獣類であろうと人間であろうと、安息式射法を行なう騎馬はことごとく軽装備の騎兵であったということである。ついで我々は次章に於て、騎兵戦における戦略、装備などに就いて述べ、安息式射法開発の必然性ともいふべきその背景に就いて考察を進めて見ようと思う。

二

以上、前章に於て概略ではあるが、地域、年代別に安息式射法について遺物を掲げ、この種の射法と思われる図文の主なものに就いて考察を進めてきた。東亜の諸地域にわたってかくも広範囲に痕跡をとどめる本論考に於ける論点たる安息式射法の実態とは、

一体、如何なるものであったのであろうか。

まず、安息国騎兵とその装備に就いて述べ、ついでその戦法および安息式射法に関する文献的証左に就いてこれを掲げるのが至当であらうと思われる。このような戦闘などに於ける基本的資料を看過して騎馬民の戦略における安息式射法開発の必然性はとうてい考えられないと思うからである。

安息の騎兵は他の騎馬民と同様、重装備騎兵と軽装備騎兵よりなっていた。

重装備騎兵はギリシヤ語で *κατάβαρτοι* / *κατάβαρτοι*（覆われた人）と呼ばれ、膝までとどく鎖子鎧もしくは札甲（鉄製）をつけた。すなわち、ブルータルコスsoのクラススによれば（Plutarchus, Crass. 二十五節）、

Θώρακες ἀνθράκωσιν ἢ αἰθινούσιν 生革と鉄製の札甲の胴鎧と見える点からも明らかである。

胸甲は光り輝き（同書、二十四節）、可成な刺突にも耐え得る強度を有していた（同書、十八、二十五節）。また頭にはマルギアナ方面の製作になる鉄製の兜をつけ、四周の視集の目を射たという（同書、二十四節）。マルギアナ Margiana はバクトリアとバルティアの故地ヒルカニアとの間にあった（Plinius, Historia Naturalis 六、

十六、十八)。楯は持たず、鎖子鎧がこれにかわつた。これに對して攻撃用武器としては大きく厚みのあるギリシヤ語で *Xyrtos* と呼ばれた強大な長槍が有名であつた。¹⁹⁾

この重装備騎兵に於ける弓はまた長大なものであつたと思われ、この点、明らかに後述の如くアカエメネス王朝期以来の強弓が痕跡をとどめていたものと思われる。

以上の重装備騎兵に於ける裝備に比し、軽裝備の騎兵といわれるものは弓矢、ことに短弓を主たる攻撃具とし、鎧はつけなかつた。本論考に於ける安息式射法の騎馬は實にこの軽裝備騎兵にあつたであろう点は容易に察せられるであらう。彼等は弓矢、馬の扱いに絶えず修練をつんだものと思われ、ユステイヌスが (*Justinus, xii 2*)

‘Hos pari ac liberos suos cura habent, et equitare et sagittare magna industria docent’ (……そして彼等は馬と弓矢には多大な勤勉さを示した)

と記していることによつてもわかるであらう。軽裝備騎兵は弓矢の他にさらに劍を吊したものと恐れ、腰部にはギリシヤ語で、*phylaxia* と呼ばれる刀子と思われるものを吊した。このマカイラは日常の用に充當するほか、戦場にあつては敵の首級をあげる為

のものでもあつたらしい (*Purpuros, Cass. 二十五節、三十一節*)。

さてここで最も注目すべきことは、安息の騎兵の中でも所謂安息式射法を行なつた騎兵は鎖子鎧、札甲、馬甲などの重装備の騎兵ではなく、服装の軽快で機敏に騎射を行ない得たであらう軽裝備騎兵であつたであらう点である。背後を顧みて騎射するなぞ重装備騎兵の不得意であらうことは自明ともいふべきである。しかも重装備騎兵に特徴的であつたあの長大な弓はやはり重装備騎兵の戦略に最もよく、軽裝備騎兵のそれはいうまでもなく、小型で速射用の広義のいわゆる「スキタイ式」彎弓であつたであらうことは論を俟たない。²⁰⁾ 短弓でしかも強大な力を誇る合せ弓の開発も既に行なわれていたのではないかと思われるのである。

次に安息の戦闘に於ける攻法に就いて知れるところを記しておこうと思ふ。

安息に於ける救陣の仕方はゆるやかな騎兵の配列にあつた。このゆるやかな騎兵は機に臨み変に變じて自由に隊列を変更するものであつた。さらにクラッスとバルティア人との戦闘によれば、その施陣の方法は、中央に軽裝備騎兵の集団を配し、その周囲を方形に重装備騎兵が取り巻いて並ぶものであつたらしい。重装備騎兵が長い槍 *Xyrtos* を以て突進するのに対し、中央の軽裝備騎

兵は敵前を疾走し、矢の雨を降らせては後退したものであるらしい。ローマの歩兵および騎兵が近づくにつれ、バルティアの輕裝備騎兵は退去し、常に一定の間隔を置いて対峙していたものと思われ、矢もそのつきるところを知らなかったという。

古代ローマに於ける戰陣はいうまでもなく五〜六列の厚さを有するファランクス *phalanx* と稱する歩兵の隊列にあり、騎兵中隊 *turmae*、騎兵小隊 *decuriae* は共に「アラニダス」(翼)として軍団の両側面に位置した。総じて、ローマの騎兵は戰闘時、重要な役割は果さなかったらしく主として追撃が主たる任務であったし、また構成人員もスペイン人、ゴール人、ゲルマン人など外国人騎兵が多かった。

ローマ軍のファランクスを基礎とした長くのびた隊列に比し、安息のゆるやかな騎兵による敷陣の方法およびその戦略はつまるどころ、ローマ軍を完全に包囲し、戰陣を攪乱するという包圍戰術にあったと考えてよいのではあるまいか。バルティア人騎兵が雄哮をあげ、雨の如く矢を降りそいで攻撃する形状は実に凄絶を極めたものであった (Herodianus, *Herodiani Historiarum Libri* Octo. iv. 28)。

かくの如き騎馬民に於ける包圍戰術は定着農耕民に於ける都城の防禦より發生したと思われる防禦を主とする戰略とは本質的に

異質であり、早くから騎兵戰に習熟していた騎馬民に於て初めて可能であり、またその騎馬の機動性と相俟つて、迅速なる攻撃および退去の戰略の發生はむしろ必然的なものではなかったかと思われる。退去が同時に攻撃であった点は第三章に詳述するところであるが、この遁走することが騎馬民の一つの戰略であったという事實はまた重要な事と思われる。このことは東亜の騎馬民に共通した戰術と考えられる。すなわち、史記、匈奴列伝によれば、

故其見敵則逐利如鳥之集 其困敗則瓦解雲散矣

と見えるから、匈奴における騎兵もまさしく、バルティア人騎兵と大同小異であり、ひとたび形勢不利と見れば、ブルータルコスのアントニヌス(四十九節)や、ヘロディアヌス(IV 30)がバルティア人騎兵に就いて語る如く、ただちに遁走したものであるらしい。同じく史記、匈奴列伝によれば、

利則進不利則退不羞遁走

と見える点からも、前述の如く退去、遁走することが同時に騎馬の機動性による戰術であったことは明らかである。

またバルティア人騎兵は、本来騎兵戰を主とし、都城の戰略が不得手であったことは、ユスティヌス(Justinus, XI 2)が

obsesas expugnare urbes nesciunt

彼等は攻められた邑をとるすべを知らなかった

と見え、ディオ・カッスイウス(Dio Cassius, XL 29)に、

dōbōrōn trōkōpōfōat' r' hōan

彼等にとって都邑を攻略することは不可能であった

とあり、さぶにタキトスのアヌルス年代記(Tacitus, Annulus X.V.

4)には、

partho ad exsequendos obsidiones nulla cominus audacia

……都邑の攻撃に対して何等の勇氣も……

と記されているのでわかるであろう。

ディオ・カッスイウス(XI 29)にバルティア人がシリア国境からキリキアにかけて、オロンテス河溪谷で都城の攻略に従事した事実を伝えているが、バルティア人は総じてこの種の戦闘が不得手であったと考えてよいであろう。このことは一つに、戦闘方法を異にする騎馬民の中に *testudo* (楯の亀甲形配列) *scalae* (梯子) *agger* (土塁) *turres ambulatoariae* (塔) *aries* (衝角) *falces murales* (鉤) *turnmenta* (砲) など典型的都城の攻撃具の發達がなかった点にあらうと思われる。^⑮

バルティア人は長期にわたる行軍には耐えられず、また冬期に於ける戦闘は回避したものであるらしい。バルティア人戦士はすぐ疲労し、ついでその戦術法をもまた、絶えず変更した。

現今の馬は騎馬の場合、一時間に約二里半、10 km を駆けるもの

と思われるから、バルティア人騎兵の行動半径も総じて大幅に異なることはなかつたであろうと思われる。バルティア人騎兵は、常に戰場に予備の馬を引きつれており、疲労した馬は常に新しい馬に替えた(Dio Cassius, XI 24)。また、騎馬戦における重要な要素は馬の水を確保することではなかつたかと筆者は考える。馬は普段でも日に約四升の水を飲み、一日疾駆した場合、約一斗四升の水を飲むという。広漠たる砂礫の大地にあってかくの如き水は何処で補給したものであろうか。事実、アンティオクスとアルタバームスの戦闘では、ローマ軍は水の欠乏によって困窮した。この水は輜重用として荷車にのせられたもの、騎兵各個別に持つ飲料の他にあつた。所謂カナアト Kanat と呼ばれる井戸および地下水道 *Syrtouet* がそれである。バルティア時代、既にカナアトが存在し、その位置は土地のものにしか知られなかつた。

水の補給できる場所で地の理を占めたところを常に確保することが騎兵戦に於ける重要な戦略であつたであろうことは推察にあまりある。敵に背を見せて退去、遁走することはまた常に一定の地歩を保つ策略でもあつたであろうし、遁走すると見せかけ、きびすをかえして攻撃に転じたり、ふりかえりざま、安息式射法を以て追撃隊を射撃するのも、かくの如き騎馬戦のみだした必然的戦法であつたと思われるのである。

三

以下、本論考に於ける論点たる安息式射法そのものに関する直接的文献資料を掲げ、考察を進めてみようと思つう。

オリエントにおける安息式射法の初現は、前述の如く、ニトロの彫刻に見られる。戦車にのるアッシリア人戦士に対し、騎馬民と思われる一人物がうしろをふりかえり騎射を行なっているのである。円錐形のフェルト製と思われる帽子、尖端の尖った靴、衣服など明らかにアッシリアの武人とは全く異なる。遺憾ながら文献資料なくその明細、人物の系統などをつまびらかにしない。アッシリア後期騎馬民の間にすでに安息式射法の開発があった明確な証左となるものと思われる。

ついで、この安息式射法といわれるものがアカエメネス王朝期、ベルシヤの頃ともなると、既にその騎兵の戦略の一端となつていたようである。すなわち、クセノフォンのアナバシス、第三章、八ノ十一節に、

Ἐκ τούτου Ἐσφοφούρι εὐθείαι διακρίνου εἴηαι· καὶ εὐλακον τῶν ὀπλῶν καὶ τῶν τελευταῶν αἱ ἐργασι αὐτῶν ὀφείλου φαλακροῦται· οὐδὲν οὖν δ' οὐδένα κερταλάμβανον τῶν πολεμίων, οἷτε τὰν ἰππέταις ἦσαν τοῖς Ἑλλήνων οἷτε αἱ περὶ τοὺς πεζοὺς

ἐκ πολλοῦ φεύγοντας ἐδύναστο κερταλάμβανον ἐν ἀκίρῳ γαλήνῃ· τὸν τὰν οὐκ αἰὼν τ' ἦν ἀπὸ τοῦ ἄλλου σφισσόμενος δύναιεν.

οἱ δὲ βαρβαροὶ ἰππέταις καὶ φεύγοντας ἄμα ἐτίθεισαν εἰς τοῦτεθεν τοσεύοντες ἀπὸ τοῦ ἰππῶν, ὀπίσθον δὲ δάσσαν οἱ Ἑλλήνες τοσοῦτον πάλιν ἐπαινεζόμενοι μαχημένους ἔδει· ὡστε τῆς ἡμέρας διῆς διέβηον οὐ πλεον περὶ καὶ εἰκοσι σταδίων, ἀλλὰ δελῆς ἀδείκοντο εἰς τὰς κόλμας.

この時以来、クセノフォンは追跡すべきであると思つた。そこで彼は、重装備歩兵と軽桶歩兵のそれを追つた。これらの歩兵はたまたま後陣の警護にあたつていた。追撃者は敵を一人も捕縛しなかつた。ギリシヤ人傭兵は馬がなく、またギリシヤ人歩兵が遠くに逃亡した敵の歩兵を少し足を伸ばして捕縛することも困難であつた。また因みに他の軍より遠く離れて敵を追撃するのも不得策であつた。

蛮族は馬で逃亡しながらも、うしろむきに騎射し、(ギリシヤ人に) 傷を負わせた。ギリシヤ人が追えば追うほど戦闘員は後方に退却し、一日のうちに二十五スタディオン以上進み、午後には村に到着した。

と見えるのであろう。チグリス河支流、ザブ河渡河直後のギリシヤ軍とアルタクセルクセス二世のベルシヤ軍との戦闘である。この一文によって、古代ベルシヤの騎兵は少くとも前

五世紀末葉、この種のいわゆる、「安息式射法」に習熟していたであろう点は明らかである。このことはアカエメネス王朝期に於けるペルシヤ人戦士は都城の攻防を主とした戦略と異なる騎兵戦に於ける騎馬民の戦法を、キンメリア、スキタイ、メディア方面のいずれかから伝承していたものと見て大過ないであろうと思うのである。このことが具体的に行なわれたのは恐らくアッシリア後期であつたろうと思われる。

ペルシヤ人は遁走しながら同時に、*deisors dnu* うしろむぎに *eis routraces* (ト *driches*) (うしろに) 馬から騎射した。*deisors arò rob traw*

ペルシヤ人騎兵の弓の射程距離内に入った場合、追撃者は多大な損害を蒙った。

一体、アカエメネス王朝期に於ける弓には長大な伝統的弓のいわゆるアッシリア式弓といわれるものと、あわせ弓と思われる彎弓のスキタイ式短弓の二種が主流であつたと思われる。

同じくアナバシス、第三卷、四章、十七節に見える、

Merída èi kai rà tòfa rà Hepará foru

「ペルシヤの弓は強大」なる一文によつてもわかる如く、この恐らくクレタ製と思われる弓は、スサおよびベルセポリスに見られるような長手のもので、騎兵が安息式射法を行う為には不適合であつた。



図10. ペルシヤ人戦士と弓
(ギリシャ壺の絵から)

あろう点はいうまでもない。したがって、うしろをふりかえつて騎射を行なつたペルシヤ人軽装騎兵は恐らく、同じくペル

セポリスに見られるような騎馬民に特徴的彎弓をもあわせ用いていたものと思われる(図10)。この一文によつて、所謂「安息式射法」は安息に於ける創始では無論なく、アッシリア後期からアカエメネス王朝期にかけて、騎馬民の間で開発されていた射法と考えられ、しかも、ギリシヤ人の耳目を聳動せしむるが如き、東方ペルシヤに於ける驚異の戦法であつたことが知られる。

それでは、「安息式射法」をかくも著名にした安息の射法とはどのようなものであつたのであろうか。ユスティヌス (Marcus Junianus Justinus A. D. 142 頃) によれば (Justin. Liber. XII. chap. II. 7)

pugnant autem procurentibus equis, aut terga dantibus:

saepe etiam fugam simulant, ut incautiores adversum vulnera insequentes habeant……

彼等は馬を以て、前方に疾駆させるか、ふりむいて戦うかした。さらにしばしば逃げると見せかけて、何の防備もなく追撃した者は身体の前部に傷を負った

と見え、バルティア人騎兵は前方に馬を疾駆させる通常の走法の他に、急激に踵を返して急襲したものであるらしい。文中“*terga dare*とは「引き返す」、*「ふりむく」*意だからである。*fugam simulare*とは「うまでもなく、逃亡を装う意で、予期しない者 *incautiores* は、*vulnus adversum* すなわち「身体の前部の傷」を負った。これは明らかに安息式射法に他なるまい。後続した敵を狙い撃ちしたわけである。ここに於て注目すべきことは、この

ような騎射に通曉した射手は我子の如く、手塩にかけて育て上げた奴隷で、乗馬と短弓に習熟して居たという点である。このような安息式射法を行なった騎兵の中には、バルティア人に席卷された他部族の戦士がいたであろうことも看過できないところである。

(Justinus Liber XII. chap. 7.)

それでは、このような射法を以て虚をつかれたローマ人戦士は、安息式射法に就いてどのような解釈をしていたのであろうか。またバルティア人はこの射法を何処で学んだのであろうか。我々は

この答をプルートアルコス クラッス、第二十四章の一文に求めなくてはならない。すなわち、

ἤγεσθαι τὰς ἀπὸ βαλλωνος ἢ ἰκέρου, καὶ τοῖοι κότερα τοῦτοι μετὰ δυνάτεω, καὶ σφοδρατέρῳ ἔργῳ, ἀνωμαλέουσ ἐπιπέσειεν καὶ τῆς φύσεω ἀφαιρησὶ τὸ ἀσθενὲω.

というのも、バルティア人は逃亡しながら、騎射を行なったからである。バルティア人はこの射法に卓越しており、スキタイに次ぐものであった。これは実に賢明な発明であり、我と我が身を救いながら戦闘を行ない、このようにすることによって逃亡の不名誉をもまた免がれるというものである。とある。

このプルートアルコスによる一文は極めて重要な事実 に就いて言及あるものと考えられる。すなわち、これによってスキタイがこの所謂安息式射法に熟達していたという事実であり、またその戦士の射法も、バルティア人騎兵のそれよりも卓越していたという点に於てである。いうまでもなく、*μετὰ δυνάτεω* の *μετὰ* とは「次に、こののちに」という意であるから、バルチア人騎兵の安息式射法はスキタイの射法に次ぐと訳出すべきであろうからである。

ついでであるが、文中の *κότερα* という言葉も「最強の」と訳すのではなく、むしろ「最も卓越した」と訳す方が、この際より適訳ではなからうか。

この一文によって、安息式射法とは追手を狙い撃ちすると同時に、自らの生命を守る *stri collocanda* 一種の防禦策の戦法であることがわかる。同時に最大の不名誉である管の戦場での逃亡、或は敵に背を見せるといふ汚名をも免がれることができる賢明な戦法であるとして、皮肉な表現を用いているのである。これによって所謂安息式射法はバルティアのお家芸ではなく、むしろ、スキタイがその射法に於て第一位を占めたことがうかがわれ、さらに、うしろを顧みて騎射する射法は、退路を確保する為の一種の防禦戦法であった点が理解できるであろう。

バルティアがスキタイから多大な文化的影響を蒙っていた点は、そのバルニ族から出たという派生の問題からも容認できることである。したがって武器、武具類一般に於ても、極めてスキタイの様相を呈していたであろう点は次の一文によっても明らかである。同じく、ユスティヌスによれば (Justinus Liber. XLII. chap. II.)

Armorum patris et Scythicus mos

武具の形式はバルチアの伝統的なものとスキタイ式のものとなるからである。とすれば、バルティア人騎兵が安息式射法に用いた弓も、クル・オバ出土のエレクトルムの壺に見られるスキタイ戦士が弦を張っている図の弓や、ヴォロネジ附近、チャストゥイエ高塚第三号墳出土銀製壺に見られるスキタイ式弓と同種の

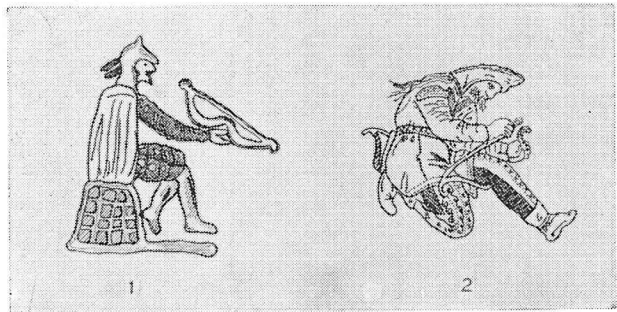


図11. スキタイおよびバルチア人戦士のスキタイ式弓
(1. パルチア王と弓, 2. スキタイ戦士と弓, エレクトルム(琥珀金)クル・オバ出土)

いわゆる広義の「スキタイ式」弓の範疇に入るものと考えてよいであろう (図11)。

しかしながら、ユーラテス河左岸にあるバルティア時代の遺跡、バグーズ(ユルジ)から発掘された弓はベルセポリスに表出された貴人の弓にも近似する点から、あるいはキスタイ式と同時に、この種の伝統的弓(ルリスタンの腰帯装飾に見える

複合式弓で、ルール人、メディア人、ルニディアヤ人が用いたもの)もあわせ使用されたものと思われる。

バルティア人に於ける安息式射法に関する文献をいましばらく紹介しておこう。

ホラーティウス・フラックス(B. C. 9 頃)の詩『グリュケラに就いて』(De Glycera (詩人、メナンドロスの夫人)の中に(Liber I. Carmen XIX. 11~12)「後退する馬に駕したバルティア人の志気が高かった」ことを述べて、

et versis animosum equis parthum

バルティア人は後退する馬に駕してなお大変な勇氣があったと記されてある。このことはまさしく安息式射法を行なったことを暗に示唆するものではあるまいか。また同書中に(Liber. II. 13. 17~18)

milles sagittas et celerem fugam parthi

バルティア人の矢の雨と迅速な逃亡

と書かれてあるところを見れば、迅速なる逃亡を以てする安息式射法の他にも、バルティア人戦士の特色として、退路を断つ意味でもあったろうか、雨の如く降りそそぐ矢の猛射があったのである。ここに於て我々は、この安息式射法とはユスティヌスの説く如く、身体の前面に傷を負わせるといふ狙い撃ちの場合と、一時的に戦陣を攪乱する鳥の矢の猛射があった点に注目しなければならぬ。

またウィルギリウス・ロー・Virgilius Maro Publius (前十七頃)のゲオルギオン Georgicon (農業の詩)三章、三十一節に

identemque fuga Parthum versisque sagittis

バルティア人の逃亡はうしろをふりむいて矢を放ち……

とあることから、ローマ時代この安息式射法が如何に著名な戦法であったか推察できらるであらう。

さらにタキトスは(Tacitus 六、三十五、二)

Cum Parthus sequi vel fugare pari arte suetus distraheret turmas, spatium isibus quaereret.

バルティア人が追跡もしくは、そのよく馴れた方法で逃げる時には、ローマ騎兵を破壊し、このようにして空間を確保す

る。

と述べ、これまた安息式射法に関する文献的証左である。fugare pari arte suetus (よく馴れた同じ方法で逃げる)とはまさしくこの安息式射法のことをいっただものであらうからである。

安息式射法が何の目的の為になされたかという問題に対し、タキトスは相手國騎兵を含めた戦陣との間に常に一定の間をとる必要性が生じた場合、自らの地歩をかため、また友軍を安全裡に退却させる為、ふりかえりざま追撃者を騎射するのだと説く。

以上が実際の戦陣に於ける安息式射法の実態を記した文献資料であるが、他に実在の種族かどうかにかに決定し難い戦士、すなわち伝説上の有名なアマゾンの中においても、この射法が行な

われた事実が認められる。すなわち、シシリー島のディオドルス Diodorus Sicurus (巻三、五十四) はリビアのアマゾンを実在の種族と認め、アトランティスとの戦闘について叙述しているが、その中に所謂安息式射法と思われる射法がアマゾン族に一般的であった点について述べている。

ὄπλοισι δὲ ζωῶναι ἀνεταρμήτους ὄψου μετήκω ὁπλοῖς, ἐξούμιν τῆς Ἀλβῶνις ταύρα τὰ ζῶα τοῖς μετήκω ἀτίοντα, ἀναρμήτους δὲ εἶθεσι καὶ λόγχοις ἐπὶ δὲ τόξοις, οἷς μὴ μόνον εἰς ἐναντίας βάλλειν, ἀλλὰ καὶ κερὰ τὰς φυλάς τοῖς ἐπιβάσσοις εἰς τοῦτῶν τοῦσιν ἐβόρχοις.

防禦用具のために彼等は大きな蛇の皮を用いた。リビアはこのような途方もない寸法の獸類を有す。攻撃用武器としては劍、槍、弓矢を用いた。ことに弓矢の場合は、単に敵と直面した時のみならず、逃亡中にも追手に向つてうしろむきに正確に射た

と書き残されているからである。κέρὰ τὰς φύλαςとはいうまでもなく、逃亡中の意であり、εἰς τοῦτῶν τοῦσιν とはうしろむきに射つ意である。ディオドルスは何故このような一文を記したのか今のところ不明確であるが、あるいはスキタイと密接な関係にある黒海周辺のアマゾンとその射法を想起してその特徴を記したか、伝聞によるか、さらには何等かの史書に基いてその特色を



図12. 狩獵文(銀製皿) ササン朝, テヘラン 国立博物館

記したものではあるまいか。

このような射法がササン朝になっても、ひきつづいて行なわれたことはいうまでもない。

新しいペルシャといわれたこの時代には復古的風潮に鑑み、アカエネス王朝期文物の再興が意図されたが、それがあらぬか、直接的にはバルティアの射法を継承したか、この種の射法が広く行なわれ、銀製皿などに於ける帝王狩獵図などに繁く描出される点はあらためて説くまでもない(図12)。

これまで述べてきた文献的証左により、安息式射法とは次のよ

うなものであったと考えられよう。

安息式射法は退路を確保すると同時に、攻撃的性格をおび、馬上より狙い撃ちして追手を倒し、また雨の如き矢の猛射を以て相手の意表を衝く奇習攻撃の一戦法ともいべきものであった。またこれは、幼少の頃より馬術、騎射に特別の訓練を受けた熟達之士を以て初めて可能な戦闘方法であった。またこの種の射法に卓絶した技術を示した種族はスキタイであつて、パルチア人戦士がこれに次いだという。

またこの射法に用いられた弓は騎馬民によって開発を見た複合式弓（あわせ弓）の短弓であつたと思われ、比較的長大な伝統的アッシリア式弓がこの種の短弓と併存もしくは交替する時期はアッシリア後期からアカエネス王朝期にかけてではなかつたかと思われる（図13）。騎馬民に於ける各種の武具、戦闘方法などが定着農耕民族のそれと融合したのもこの時期であろうと思われる（図12）。

このような射法はアカエネス王朝期の属領に行なわれたであ

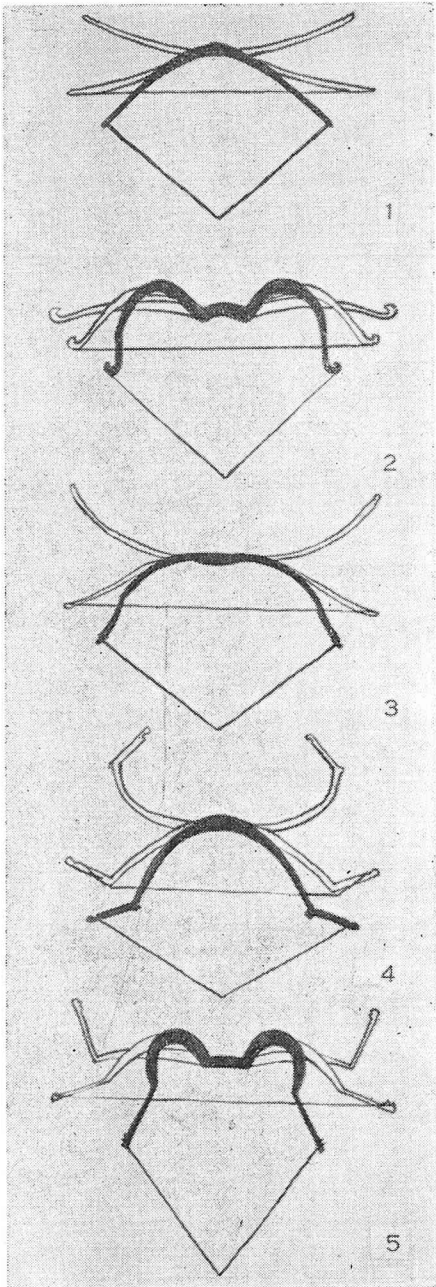


図13 1. アッシリア式弓 2. スキタイ式（キュビド式）弓 3. パルチア式弓 4. トルクスタン式弓

ろうし、新しい騎馬戦の戦略と共に、スキタイ、パルティア方面から、匈奴を経由し、戦国、漢代の中国に伝播していったものであろう。戦国末より漢代にかけてのこの種の短弓の発現はこの間の事情を如実に物語る証左と思われる(図13)。プルートアルコススのクラッスス(十八、二四)に散見するパルティアの弓の速度と強度とは、やはりあわせ弓の強度を以て初めて可能ではなかったかと思われるのである。

おわりに

安息式射法は安息の創始によるものではなく、本来、キンメリア人、スキタイ人など騎馬民の間に於て開発された一種の戦闘方法であった。この種の射法の騎馬民における開発の発端はやはり獲物の頭部、頸部、胸部などの急所をふりかえって射撃する狩猟にあったのではないかと思われ、その驚くべき速度と急速に転移する騎馬の動きからの射撃が生命であった。このことはクセノフオンのキエネーゲティコス(狩猟記)中に、(Xenophon Cunegeticus, chap. 12.1~3)

τὴ δὲ πρὸς τοῦ πάλαιου μάκτορα ταραχῆς

またこれは(狩猟は)戦闘に対する最良の修練となる

と見え、狩猟と戦闘の密接な関係を明確に記しているのもわか

るであろう。クセノフォンは前述の如く、古代ペルシャ人の所謂「安息式射法」等を自ら目のあたりにし、体験して居るからである。

同じ頃、中国に於ては、史記、匈奴列伝によれば、趙武靈王が胡服に俗を変じて、騎射をこれに習ったという。アカエメネス王朝期における同じような騎馬民の戦闘方法の採用を顧慮する時期せずして両地に同じ傾向が看取される点、甚だ興味深いものといわなくてはならない。この頃に於て、ようやく、四隣の騎馬民の動向、戦略を含めた武具類に於ても活発な交流があったものと解して大過ないものと思われるからである。

① Justinus, Plutarcus, Horatius 等、史家、詩人の言及あるところ、後の文献資料参照。


② Lauffer, B. "Chinese Pottery of the Han Dynasty", Leiden, 1909 p. 218.

③ Rostovtzeff, M. "Inlaid Bronzes of the Han Dynasty", p. 60.
④ 原田淑人博士「漢代の騎射狩猟図文に就いて」(『史林』第十三巻一号)。

⑤ 駒井和愛博士「中国古代の車馬狩猟図」(『中国考古学研究』一九五二年)。

⑥ 江上波夫教授「漢代の狩猟・動物図様について」(『アジア文化史研究 論考篇』一〇四頁〜一〇五頁)。

「シムリヤ、あるいはイランの美術においても、漢代のそれにおいても、馬上より後を顧みて動物を騎射している図様とともに、馬上よ

- り正面を向いて射狐している図様も同時に存し、この両様の姿態はいずれも実際の射狐の際に等しく起りうるものと思われるから、ムリヤならびに漢代の美術における騎射図の姿態の一致はむしろ実際の射狐の忠実な描写の必然的結果に他ならないと認められののである」
- 江上教授は以上の如く述べられ、ウシロウをふりかえりて騎射する姿態を実際の射狐の描写で必然的結果と認めておられる。私も全く同見解を有するものである。後章に於ける文献資料に「マリ」これが戦闘射狐を含め、瞬間的動作をとらえたものであることは明白である。
- ⑦ 林良一助教授『シルクロード』美術出版社 一九六二年 一九七頁。
- ⑧ Layard "Nineveh and its Remains" p. 392~393.
- ⑨ Minns, E. H. "Scythians and Greeks" p. 55.
- ⑩ Plutarcus "Crass" § 24.
- ⑪ 三章、文献、クセノフオンの項参照。
- ⑫ 三章、文献、チャオオ、ルヌ・ヌィクルヌの項参照。
- ⑬ Tallgren, A. M. Sibirien (Ebert, M. "Reallexicon der Vorgeschichte", Bd XII)
- ⑭ 拙稿「狐圖考」(『考古學雜誌』第五十五卷第四頁)。
- ⑮ Rawlinson "The Sixth Oriental Monarchy" pp. 404~405.
- ⑯ Strabon II, 5, 22. "Ammianus Marcellinus" XXII, 8, 37. Plinius, "Historia Naturalis" IV, 24.
- ⑰ Caesar "Gallie War" (Loeb, Classical Library, appendix p. 595~599)
- ⑱ ibid.
- ⑲ Polybius, X, 28, § 2, § 5.
- (東京国立博物館技官、)

This article will treat the construction of *Nagaoka* Palace from another point of view: For the physical reason that enormous volume of timber should be used after a pretty long period of drying, it goes without saying that *Daigokuden* 大極殿 and *Dairi* 内裏, which had already been completed on the New Year's day in the next year of the transfer of the capital, should be constructed with materials of the former palace, *Naniwa* Palace 難波宮; and judging from the fact that the reconstruction of *Daigokuden* and *Otemmon* 応天門 at *Heian* Palace 平安宮 in "*Sandai-jitsuroku*" 三代実録 needed more than one year's period of drying timbers, the construction of *Nagaoka* Palace by *Tanetsugu* might be reasoned to be mainly the removal work of the former Palace.

Parthian Shot

by

Takashi Sōma

Ancient relics from the Orient and East Asia have many traces of the way to shoot backward on the horse back. They are known as "Parthian Shot", but originally Scythians or nomad tribes such as Cimmerians established it earlier than Parthians. This article introduces by early literature "Parthian Shot" to be important art developed in the battles among nomad tribes.